

を決定するために不可欠の検査である。肺動脈造影で肺胸膜に接して存在し、明確な囊をもつ型に対しては囊摘出術が可能で、囊をもたず複雑に拡張・迂回した動静脈をもつ型に対しては、大きさ、局在に応じて区域切除あるいは肺葉切除が必要である。

14. 外傷性右横隔膜ヘルニアの1治験例

星 永進・鈴木 伸男 (鶴岡市立荘内病院)
 齊藤 博・石橋 清 (外科)
 中村 千春・鷺尾 正彦 (山形大学第二外科)

最近我々は、転落事故による多発外傷で外傷性横隔膜ヘルニアの1症例を経験したので報告する。

症例は38才の男性で、昭和59年10月31日に工事現場にて約5mの高さより転落し受傷した。諸検査の結果、右肋骨骨折、右血気胸、外傷性横隔膜ヘルニア、肝内血腫、第3腰椎圧迫骨折と診断した。受傷直後は肝内血腫以外には腹腔内出血はないと判断され、また、重篤な呼吸障害もなかったため右胸腔持続ドレナージにて保存的に治療した。昭和59年11月20日に第3腰椎圧迫骨折に対し、Harrington 後方固定および後側方固定を整形外科で行った。その後、CTで肝内血腫がほぼ吸収されたことを確認し、昭和60年1月9日に右横隔膜ヘルニアに対する手術を行った。手術は右開胸にて、胸腔内に嵌入していた肝臓を腹腔内へ還納し、横隔膜欠損部は10×7cm大のTeflon felt patchを用いて修復した。術後経過は良好で第16病日に退院した。

15. 高令者(70才以上)のA-Cバイパス症例の検討

春谷 重孝・伊藤 文夫 (立川総合病院心臓)
 小熊 文昭・竹内 誼 (血圧センター)
 坂下 煎

A-Cバイパス術122例中70才以上は11例9.2%であった。緊急手術を必要とした症例は69才以下111例中47例42%、70才以上11例中5例45%と両者に差はなかった。70才以上のA-Cバイパス症例の手術死亡はなかったが、グラフト流量は少く、術中術後出血量は多い傾向がみられた。術後管理はIABP使用やカテコラミン投与の頻度が多く、胸骨哆開例や長期呼吸管理の必要な症例があった。早期グラフト開存率は良好であった。術中、術後管理を慎重に行えば高令者のA-Cバイパス術は安全に行い得る。

16. 最近経験した感染性心内膜炎(IE)の2手術治験例

今泉 恵次・山崎 芳彦
 宮村 治男・福田 純一 (新潟大学第二外科)
 吉村 孝夫・陳 国生
 山洞 典正・江口 昭治

最近66才女性 Ms+AsR, 11才女児 MR の活動期 IE 2症例に対し、手術を行ない良好な結果を得た。IEの治療の決め手は早期診断と適切な抗生物質の使用であることはもちろんであるが、内科的に感染症状を治療できても、弁と周囲組織への疣贅の付着、弁穿孔、腱索断裂、細菌性動脈瘤などの心内膜病変の自然治癒は望めないため、心機能が悪化する前に積極的に外科治療すべきである。

IEの診断と手術時期の決定に際し、疣贅の付着、弁の破壊の程度、心機能の推移などを、非侵襲的に追跡できる心エコー法は有用な検査法である。

17. 人臍帯静脈グラフトを用いた四肢血行再建術

吉井 新平・神谷喜八郎
 橋本 良一・秋元 滋夫
 大島 哲・保坂 茂 (山梨医大第二外科)
 上村 省治・松川哲之助
 上野 明

当科では過去13ヶ月間に16例に対し28本の人臍帯静脈グラフトを使用した。年齢は35~95才(平均69才)、男14、女2例であった。疾患はASO 10例、TAO 4例、動脈血栓症2例で、初回手術として20本を使用した。部位はFemoro-Pop 9本、Ileo-P 5本、F-Tibial 2本、Aorto-Tibial, Axillo-F, Ileo-tibial, P-dorsalis pedis 各々1本で、何らかのtroubleで再移植した例は1回が3例、2回、3回各1例、計8本を使用した。移植後の血栓閉塞は1回が3例、2回、3回各2例、またグラフト感染を3例に認めたが、最近の9例にはない。これら合併症はその都度対処可能であり、現在全例とも所期の目的をはたしておりgive up例はない。

今回、本グラフト使用例の概要を報告するとともに、症例及び、実物を供覧し、使用上のノウハウについて言及したい。

18. Rate responsible pacemaker の紹介

桜井 淑史 (新潟市民病院 第二外科)

Dual chambered pacing のVDDまたはDDDペースメーカーによる適切な心拍数の反応は、正常な洞結

節機能の存在と心房粗細動および他の心房性不整脈のないことが条件となるが、約30%はVDD, DDD PMが適当でないといわれている。このためより生理的な心拍数の反応をえるため、pH, 呼吸, 心室再分極, 酸素飽和度, 体温, 身体活動などをパラメーター (Sensor) とする研究が行われているが、1984年10月より身体活動を圧電素子で電気信号に変換させる Medtronic 8400, 8402 (VVI+Act) を4例, 心室再分極をパラメーターとして Q-T 時間の変化により心拍数を調節する Vitatron QTX 911 (VVI+TX) を4例臨床使用した。

VVI+Act では身体活動でペースングレートの増加はえられるが、発熱, ストレスなどでの増加はえられない。VVI+TX ではペースングレートの増加が安静時にもおきることがあり調節は難しい点もある。何れにしても階段の昇降などには心拍数の増加がえられ有効であった。

19. 解離性大動脈瘤に対する3手術治験例

山口 明・大関 一 (竹田綜合病院心臓)
丸山 行夫・土田 昌一 (血管外科)
岩松 正
寺島 雅範・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

当院における解離性大動脈瘤に対する手術経験は3例あり、全例生存している。3例とも男性で、年齢は、59才、63才、65才で、2例に高血圧の病歴があった。DeBakey 分類ではI型が1例でARを合併し、他の2例はII型であった。発症から手術までの期間は、1日、40日、116日と多様であった。手術術式では、I型で、弓部の3枝に解離が及んでいた例にAVRと無名動脈、左内頸動脈への2本の枝付きグラフトで、上行大動脈を置換し、II型で無名動脈に解離が及んでいた例に、同部の内膜固定と上行大動脈にリング付きグラフトを内押しした。他のII型では、interpositionを行った。

20. 血管系腫瘍の2例 (乳児例)

白岩 邦俊・乾 清重 (太田綜合病院)
小児外科
佐久間秀夫 (筑波大学病理)

小児の血管系の腫瘍として稀な血管周皮腫の1例とこれに良く似た毛細血管腫の1例を経験した。

症例1は生後7日目の男児で、生下時より胸部、腹部などの軟部組織に腫瘍があり、切除した。その後も度々他部位に出現したためその都度切除した。組織診断は血管周皮腫であった。

症例2は10カ月の女兒、生後8カ月頃左肩に腫瘍が出

現、少しずつ増大してきたため切除した。腫瘍の組織診断は毛細血管腫であった。

21. 小児鼠径ヘルニア嵌頓症例の検討

大沢 義弘・松浦 恵子 (新潟大学医学部附)
内藤万砂文・八木 実 (属病院小児外科)
岩瀬 真

鼠径ヘルニア治療上問題となる嵌頓について、起こし易い症例、早期手術の適応、嵌頓の程度と緊急手術の関係を明らかにすべく検討を加えた。

対象は昭和56年以降の待機手術例174例と、46年以降の嵌頓緊急手術例13例である。

これらを検討したところ、乳児期早期に発症するヘルニアは嵌頓し易く、最初に嵌頓で発症する例も多い。外鼠径輪径より嵌頓の発症を予測することはできない。嵌頓発症後24時間以上経過した例に合併病変を有した。内鼠径輪にて絞扼された嵌頓は整復されにくいと考えられる。

22. 当科における腸重積症の治療について

八木 実・岩瀬 真
勝井 豊・山際 岩雄 (新潟大学附属病院)
高野 邦夫・内藤 真一 (小児外科)
松浦 恵子・近藤 公男

腸重積症は乳幼児の急性腹症のなかでは比較的頻度の高い疾患である。バリウム整復により軽快するものがほとんどであるが、処置が遅れ腹膜炎を併発し治療に難渋するものもある。その初期治療は小児科で行なわれるが整復困難で外科に治療が委ねられる場合も多く、治療経験のない外科医は少ないと思われる。

当科における腸重積症例は他院での整復不能例が大部分であるが、入院後にバリウム整復を再び試み整復に成功する場合が多い。最近では整復を無麻酔あるいはセルシン等の鎮静剤の使用のみで行なうことが多いが良好な整復が得られている。今回は症例を供覧するとともに、現在我々が行なっている治療方法につき述べてみたいと思う。

23. 過去5年間当科での胃・十二指腸潰瘍手術例71例の実態と潰瘍 (症) 亜型分類の試み

本間正一郎・小林 英司 (県立六日町病院)
高橋 辰弥 (外科)

昭和54年以来当科での潰瘍手術例71例をまず検討した。MG群39例 (難治10, 出血19, 出血+穿通6, 穿孔4), DG群24例 (4, 3, 1, 13), MDG群8例 (1, 2,